

## 譬喩の歌——植物の喩——

小野寺 静 子

### はじめに

万葉集の卷三、七、十、十三、十四に「譬喩歌」、卷十一に「譬喩」と分類される歌々がある。卷十一の「譬喩」も「譬喩歌」のことであるから、ここでは「譬喩歌」に統一して記す。この「譬喩歌」の由来は、『毛詩』大序の六義の「風」に関する「鄭箋」の「風化風刺、皆謂比喩不斥信」などによると説かれていることから、井手至氏は、この名義の引き当てが正當なものとすれば、万葉集の「譬喩歌」部には、暗示的な喩の歌が集められていることが期待されるものと指摘<sup>1)</sup>、その後、その考えをより積極的におし進め、万葉集の「譬喩歌」は卷七の一例を除き、他はすべて喩歌であると述べている<sup>2)</sup>。井手氏のこの考えは、万葉集の「譬喩歌」は喩の歌として扱われていたということを積極的に示すものである。ただ、「譬喩歌」部には直喩や隱喩がないといってしまうてよいのかは疑問であるが、万葉集の「譬喩歌」部の歌は喩性によって分類されたものといえるのであろう。

万葉集の「譬喩歌」部の歌の題詞や左注に、「寄衣」、「右○首寄衣喩思」などとあるところによると、編者には物をもって譬えるという意識があったのだらう。例えば卷七「譬喩歌」部の冒頭歌、「今つくる斑の衣面影に我に思ほゆいまだ着ねども」(七・一二九六)の題詞には「寄衣」とあるから、編者は「斑の衣」が女性を譬えるもので、それ故にこの歌が「譬喩歌」であるとするのであり、物が何かを譬えているという認識によってそれが「譬喩歌」であるとしているわけである。しかし、一二九六番歌でいえば、「今作る斑の衣……いまだ着ねども」——今作っている斑の色摺りの衣をまだ着ていない——までで譬喩をあらわすのであって、「斑の衣」だけが譬喩というわけではない。この歌について井手氏は、「第二句の『衣』と結句の『着る』とは、縁語としての意識をもつて用いられていたのではなからうか。」と述べ、ここでいう縁語とは、「他の語による表現も可能などところに、意識的にある用語と類縁関係のある語を用いた表現が行われる時、そのゆかりのある語をすべて名づけて」いうとし、ここでは衣を着る、の表現は男が女を妻とする、女の許に通うなどの意を譬喩的に表すものとして用いられていたと述べている<sup>3)</sup>。喩歌においては、譬喩の媒体、及びその類縁によって重ね用いられた語も譬喩的表現として理解できるのである。万葉集中の喩歌の多くがこの手法によって行われているのであり、集中の喩歌が喩歌である由縁は、譬喩の語と譬喩の媒体の語が重ね用いられることによってであるといつてよいのではないだらうか。ここでは、そうした譬喩の語とその縁によって用いられた語を合わせ持つ喩表現に絞って考えていきたい。

「譬喩歌」部のうち、何に寄せてのものであるか、題詞によって明記している卷七では、衣—8、玉—16、木—8、花—7、川—7、海—9、糸—1、

倭琴―1、弓―2、山―5、草―17、稻―1、鳥―1、獸―1、雲―1、雷―1、雨―2、月―4（一首は譬喩歌でないとの注がある）、赤土―1、神―2、埋木―1、浦砂―2、藻―4、舟―5、また左注で明記している卷十一では、衣―2、弓―1、舟―1、魚―1、水―1、菓―1、草―4、標―1、瀧―1の各例が譬喩の媒体としてあげられている。題詞や左注で明記していないもの、「譬喩歌」部に入っていないが内容的に譬喩歌とみなせるものを含めると、譬喩の媒体はもっと多彩となる。この中の植物群は生長に伴う変化があり、その変化の過程やその過程での人間の関わりが、その類縁語と重ね用いられて譬喩的表現になっているという特徴がある。生長の変化も、その過程で関わる人間の動作も、春から秋にかけてのいわば生産に関わるものであるといつてよい。この植物の一年のサイクルの生長の過程、その過程に関わる人間の作用、動作が譬喩（喩）として歌われるということは、万葉集の譬喩歌のあり方の一つの姿を提示していることにならないだろうか。万葉集の喩歌の一端を考えるべく、ここでは植物が譬喩の媒体となっているものについてみていきたい。ただし、海藻の類は除外してのものである。

## 一

喩歌に植物がどのようにあらわれているのかを具体的にみていくのであるが、まず、「譬喩歌」部の歌の中から喩歌と認定できるもの（「譬喩歌」部の歌はすべて喩歌とはなっていない）、次に「譬喩歌」部の歌ではないが注釈書などで寓意があると指摘されているものを対象とした。

まず、植物の生長過程の諸相に関わるものから考える。これには、苗である、蕾である――まだ、咲いていない――、葉柄が伸びる、穂が出る、花が咲く、花だけ咲いて実にならない、花が散る（うつろう）、蔓が這う、葉が散る、実になる、枯れる、をあげることができる。苗から枯れるまでに至る過程は植物の一年間の生長過程である。それがそのまま女性の乙女から大人の女性となって結婚に至るまでの譬喩として用いられている。すなわち、おまかにいうならば、苗や蕾は女性がまだ若く大人になっていないこと、葉柄がのびる、穂が出る、花が咲くなどの植物の盛りは娘盛りを、蔓が延う、花が散る、葉が散る、実になるとといった植物の生長の結実は結婚、女性を自分のものとするということを譬えているということが出来る。個々の例については、注釈書などによってすでに提示されていることであるが、特に喩歌であるとの指摘のないもの、喩歌の歌とすることについては問題のある歌があるので、そのことについてまず述べておきたい。なお、「譬喩歌」部のものでなくとも寓意をもったものとしては定説となっているものについては改めて述べない。

苗である、蕾である、花がまだ咲いていない、は女性がまだ若く年頃になっていないことを表している。

## 藤原朝臣久須麻呂の来報ふる歌二首

春雨を待つとにしあらし我がやどの若木の梅もいまだ含めり（四・七九二）は、

## 大伴宿祢家持、藤原朝臣久須麻呂に報へ贈る歌三首

春の雨はいやしき降るに梅の花いまだ咲かなくいと若みかも（四・七八六）

に和えた歌で、七八六が寓意をもった歌であるから、七九二も寓意があるような印象を受けるが、家持の娘と久須麻呂のことなので、実景の歌と考え

「含めり」に寓意はないと考える。

花が咲くは女性が年頃になることを譬えていると考えてよいが、別の解があるものなどについて述べておきたい。

#### 橘の歌一首 遊行女婦

君が家の花橘はなりにけり花なる時にあはましものを（八・一四九二、夏雑）

この歌は譬喩歌ではないが、「なりにけり」は橘の実がなるで結婚の意、「花なる時」は盛んな時、結婚の年頃の時を寓し、宴席に侍った遊行女婦がその家の庭の橘を見て、あなたが盛りの年頃にお逢いしたかった、あなたはもうお相手がいるのですね、とその家の主人を氣遣った一種の讚美表現であろう。集成に、「家持の家の宴に招かれての詠か。」とあり、「もつと以前からお目にかかりたかったと、ひいきを願う挨拶歌」との指摘がある。

#### 問答

狭野方は実になりにしを今更に春雨降りて花咲かめやも（十・一九二九）

「実になりにしを」は既に結婚していることを譬え、「春雨降りて花咲かめやも」も集成が、「男から誘いかけを受けることの譬え」と指摘するように、譬喩表現である。

#### 花に寄する

卯の花の咲くとはなしにある人に恋ひや渡らむ片思にして（十・一九八九、夏相）

「卯の花の」は「咲く」の譬喩的枕詞とするものも多いが、「卯の花の咲く」で女性が年頃になることを譬えているととる。この場合は「咲くとはなしにある人」であるから、まだ若い娘に片思いをつづける男性の歌ということになろう。

#### 譬喩歌

美夜自呂のすかへに立てる顔が花な咲き出でそねこめてしのはむ（十四・三五七五）

の「咲き出づ」は派手に振る舞うことの譬えとされるが、「顔が花」が咲き出るとは、年頃の色香を漂わせるの意と考えてよいのではないだろうか。ひそかに思い讚えようと思っている女性が年頃の色香をただよわせるので、他の人が心を寄せるのを恐れた歌で、全注に「……女を自分だけで独占しようという気持ちだめられているようにも思われる。」とあるのによりたい。

以上によって、花が咲くの喩喩としての意は、女性が年頃になることと考えてよいだろう。

次に花が散るであるが、これは結婚する、自分のものとする意を寓している。

#### 佐伯宿祢赤麻呂の歌一首

初花の散るべきものを人言の繁きによりてよどむころかも（四・六三〇）

の「初花の散るべきものを」は、「女の外心つかむを、花の散によそへたり。」<sup>(4)</sup>、「人ノ盛りモ程過レバ、衰テシホル、花ノ如クナレバ」とするものもあるが、「初花」は年頃の女を譬え、「初花の散る」で女性がもう結婚できる年頃であるということを譬えていると考える。

#### 譬喩歌

橘の花散る里に通ひなば山ほととぎすともさむかも（十・一九七八）

の「橘の花散る里」は、美しい女のいる家を譬喩したともされるが、美しい女は自分が射止めた女で、そのことを「橘の花散る」と寓したものと考え。蔓が延う、葉が散る、実になるも花が散ると同じようなことを寓している。

#### 丘を詠む

片岡のこの向つ峰に椎蒔かば今年の夏の陰にならむか（七・一〇九九、雑歌）

の歌については後述するが不明な点があり明かでない。椎が夏の陰になるというのは恋が実ることを譬えたのだろう。

#### 花に寄する

息の緒に思へる我を山ぢさの花にか君がうつろひぬらむ（七・一三六〇）

は、「君がうつろひぬらむ」と、うつろふの主語が「君」となっている点から考えると、他例と同様に寓喩歌としてよいが、疑問な点がなくもない。また、「うつろふ」はこの場合、しばむという意になるのだから、「うつろふ」という語はものの変化をいつているものであり、咲くとか散るといった、限定された状態を表わす語とは異なろう。極端に言えば、花が「うつろふ」とは、しばむ、色があせるといった、花が変わる全ての状態が「うつろふ」であるといえる。が、この歌の「君がうつろひぬらむか」は「山ぢさの花」がしばみやすい花であるところから歌われたものであり、その縁によって「うつろひぬらむか」が歌われたのであろうから、他とは少し異なるという前提のもとに寓喩の歌としておきたい。井手氏は、「山ぢさの花」が移り気な仇し女を寓喩する媒体として、この歌に表現せられたものと見れば、一首は十分寓喩の歌として通用する<sup>(6)</sup>と、寓喩歌であることを指摘している。「山ぢさの花がうつろふ」とは心変わりすることの寓喩である。

花だけ咲いて実にならないは、口先だけで結ばれない意の寓喩である。また、枯れる、としては次の例があげられる。

#### 山部宿祢赤人の歌一首

我がやどに韓藍蒔き生はし枯れぬれど懲りずてまたも蒔かむと思ふ（三・三八四、雑歌）

は雑歌部の歌であることから、必ずしも譬喩歌とは見なされないが、集成に女性を「韓藍」に譬えた寓喩歌とみられる、という発言がある。とすれば、「韓藍（の種を）蒔く」と共に「枯れぬれど」も結婚しないことの寓喩としてよいだろう。

以上、植物の生長過程が寓喩となることについて概略を述べたが、以下の例は今まで述べてきたのとは異なる点があるので、そのことを指摘しておく。

#### 平群女郎、越中守大伴宿祢家持に贈る歌十二首

松の花花数にしも我が背子が思へらなくにもと咲きつつ（十七・三九四二）

の「松の花」が「もとな咲きつつ」は、「松の花」に自分、咲いているは思いが盛んなことを譬えているのだろう。大人としての家持への思いであるのだから、この歌の松の花が咲いているというのも年頃であるということであらわすことにもなるが、めだたない松の花がやたらと咲いているので、家持になかなか顧みられない嘆きを表しているから、「花が咲く」の他の例と異なるところがある。

## 太宰帥大伴卿の和ふる歌一首

橘の花散る里のほととぎす片恋しつづ鳴く日しそ多き（八・一四七三）  
 の「橘の花散る」は、旅人の妻が亡くなったことを表し、

昔、娘子あり、字を桜児といふ。ここに二人の壮士あり、……

春さらばかざしにせむと我が思ひし桜の花は散り行けるかも その一（十六・三七八六）  
 の「散り行く」は桜児が死んでいったことを表す。

五年正月四日に、治部少輔石上朝臣宅嗣の家にして宴する歌三首  
 言繁み相問はなくに梅の花雪にしをれてうつろはむかも（十九・四二八二）

右の一首、主人石上朝臣宅嗣

勝宝九歳、六月二十三日に大監三形王の宅にして宴する歌一首

咲く花はうつろふ時ありあしひきの山菅の根し長くはありけり（二十・四四八四）

右の一首、大伴宿祢家持、物色の変化ふことを悲しび怜びて作る

二月、式部大輔中臣清麻呂朝臣の宅にして宴する歌十五首

八千種の花はうつろふ常磐なる松のさ枝を我は結ばな（二十・四五〇一）

右の一首、右中弁大伴宿祢家持

の三首は、いずれも気の合った者同士というものの役人たちの儀礼性の加わる宴席での歌で、政治的なことがからんでいたりして、寓意はあるが今までみてきたものとは異質である。

住吉の浜松が根の下延へて我が見る小野の草な刈りそね（二十・四四五七、家持）

の歌も同じく宴席の歌であるが、「下延へて」は、『万葉集』の用例から考えて、人についてというのが一般である。寓意があるか。」という指摘があり、寓意があるのかもしれないが、その寓意のあり様はすぐ前の三首と同様である。

こうした異例のものは、ほとんどが末期万葉のものであることから考えると、これらは植物の生長過程が喩になっっている本来のものからはずれていった、変容していったものといえ、万葉集の喩歌の変遷を語るものであろう。したがって、万葉集の喩歌を考える場合、この変化した姿もくめてみていく必要があるが、それは喩の変遷を考察する中でみていくべきだろうから、ここでは除外する。

以上の事柄を踏まえ、植物の生長過程が寓意を持つもの、その生長過程が具体的にどのような寓意を持つのかを、具体的に歌をあげて次の項に示す。

## 二

女が若く大人になっていない

○苗である

大伴宿祢駿河麻呂、同じ坂上家の二嬢を娉ふ歌一首

春霞春日の里の植ゑ小水葱苗なりと言ひし柄はさしにけむ（三・四〇七、譬喩歌）

譬喩

三島菅いまだ苗なり時待たば着ずやなりなむ三島菅笠（十一・二八三六）

○蕾である、まだ咲いていない

大伴宿祢家持、藤原朝臣久麻呂に報へ贈る歌三首

春の雨はいやしき降るに梅の花いまだ咲かなくいと若みかも（四・七八六）

うら若み花咲かたき梅を植ゑて人の言しみ思ひそ我がする（四・七八八）

花に寄する

春日野に咲きたる萩は片枝はいまだ含めり言な絶えそね（七・一三六三、譬喩歌）

譬喩歌

あど思へか阿自久麻山のゆづるはの含まる時に風吹かずとも（十四・三五七二）

恋情が起きる

○生える

旋頭歌

あられ降り遠江の吾跡川楊刈れどもまたも生ふといふ吾跡川楊（七・一二九三、人麻呂歌集）

女が年頃になる

○葉柄がのびる

大伴宿祢駿河麻呂、同じ坂上家の二嬢を娉ふ歌一首

春霞春日の里の植ゑ小水葱苗なりと言ひし柄はさしにけむ（三・四〇七、譬喩歌）

○穂に出る

稲に寄する

石上布留の早稲田を秀でずとも縄だに延へよ守りつつ居らむ（七・一三五三、譬喩歌）

水田を詠む

あしひきの山田作る児秀でずとも縄だに延へよ守ると知るがね（十・二二一九、秋雑）

○花が咲く

橘の歌一首 遊行女婦

君が家の花橘はなりにけり花なる時にあはましものを（八・一四九二、夏雑）

問答

狭野方は実になりにしを今更に春雨降りて花咲かめやも（十・一九二九）

花に寄する

卯の花の咲くとはなしにある人に恋ひや渡らむ片思にして（十・一九八九、夏相）

花に寄する

我が里に今咲く花をみなへし堪へぬ心になほ恋ひにけり（十・二二七九、秋相）

譬喩歌

美夜自呂のすかへに立てる顔が花な咲き出でそねこめてしのはむ（十四・三五七五）

○実になる

大伴坂上郎女の歌一首

風交じり雪は降るとも実にならぬ我家の梅を花に散らすな（八・一四四五、春雑）

藤原朝臣八束の梅の歌二首 八束、後の名は真楯、房前の第三子にあたる

妹が家に咲きたる梅のいつもいづもなりなむ時に事は定めむ（三・三九八、譬喩歌）

妹が家に咲きたる花の梅の花実にしなりなばかかもかくもせむ（三・三九九、譬喩歌）

結婚する、自分のものにする

○花が散る

大伴宿祢駿河麻呂の梅の歌一首

梅の花咲きて散りぬと人は言へど我が標結ひし枝ならめやも（三・四〇〇、譬喩歌）

## 佐伯宿祢赤麻呂の歌一首

初花の散るべきものを人言の繁きによりてよどむころかも（四・六三〇）

## 厚見王、久米女郎の報へ贈る歌一首

やどにある桜の花は今をかも松風速み地に散るらむ（八・一四五八、春相）

## 久米女郎の報へ贈る歌一首

世間も常にしあらねばやどにある桜の花の散れるころかも（八・一四五九、春相）

## 大伴家持、紀郎女に贈る歌一首

なでしこは咲きて散りぬと人は言へど我が標めし野の花にあらめやも（八・一五一〇、夏相）

## 県犬養娘子、梅に依せて思ひを発す歌一首

今のごと心を常に思へらばまづ咲く花の地に落ちめやも（八・一六五三、冬雑）

## 譬喩歌

橘の花散る里に通ひなば山ほととぎすとよもさむかも（十・一九七八）

## （防人歌）

我が門の片山椿まこと汝我が手触れなな地に落ちもかも（二十・四四一八）

## ○蔓が這う

## 譬喩歌

上野安蘇山つづら野を広み延ひにしものをあぜか絶えせむ（十四・三四三四）

## ○葉が繁る

## 丘を詠む

片岡のこの向つ峰に椎蒔かば今年の夏の陰にならむか（七・一〇九九、雑歌）

## ○葉が散る

## 譬喩歌

祝部らが斎ふ社のもみち葉も標縄越えて散るといふものを（十・二三〇九）

## ○実になる

大伴宿祢、巨勢郎女を娉ふ時の歌一首 大伴宿祢、諱を安麻呂といふ。難波朝の右大臣大紫大伴長徳卿の第六子にあたり、平城朝に大納言大將軍に任ぜられて薨す

玉葛実成らぬ木にはちはやぶる神そつくといふならむ木ごとに（二・一〇一、相聞）



和ふる歌一首

我妹子がやどの橘いと近く植ゑてしゆゑに成らずは止まじ（三・四一一、譬喩歌）

大伴坂上郎女の歌二首

山菅の実成らぬことを我に寄そり言はれし君は誰とか寝らむ（四・五六四）

木に寄する

向つ峰に立てる桃の木成らめやと人そささやく汝が心ゆめ（七・一三五六、譬喩歌）

花に寄する

我妹子がやどの秋萩花よりは実に成りてこそ恋憎さりけれ（七・一三六五、譬喩歌）

大伴坂上郎女の歌一首

風交じり雪は降るとも実にならぬ我家の梅を花に散らすな（八・一四四五、春雑）

橘の歌一首 遊行女婦

君が家の花橘はなりにけり花なる時にあはましものを（八・一四九二、夏雑）

舍人皇子に献る歌二首

冬ごもり春へを恋ひて植ゑし木の実になる時を片待つ我ぞ（九・一七〇五、人麻呂歌集、雑歌）

春相聞

出でて見る向かひの岡に本繁く咲きたる花の成らずは止まじ（十・一八九三、人麻呂歌集）

問答

狭野方は実になりにしを今更に春雨降りて花咲かめやも（十・一九二九）

物に寄せて思ひを陳ぶる

橘の本に我が立ち下枝取り成らむや君と問ひし児らはも（十一・二四八九、人麻呂歌集）

譬喩

大和の室生の毛桃本繁く言ひてしものを成らずは止まじ（十一・二八三四）

雑歌

足柄の箱根の山に粟蒔きて実とはなれるをあはなくも怪し（十四・三三六四）

こころがわりする

○花がうつろう

花に寄する

息の緒に思へる我を山ぢさの花にか君がうつろひぬらむ（七・一三六〇、譬喩歌）

口先だけで結ばれない

○花だけ咲いて実にならない

巨勢郎女の報へ贈る歌一首 即ち近江朝の大納言巨勢人卿の女なり

玉葛花のみ咲きて成らざるは誰が恋ならめ我は恋ひ思ふを（二・一〇二、相聞）

木に寄する

はしきやし我家の毛桃本繁み花のみ咲きて成らざらめやも（七・一三五八、譬喩歌）

花に寄する

見まく欲り恋ひつつ待ちし秋萩は花のみ咲きて成らずかもあらむ（七・一三六四、譬喩歌）

大伴家持の贈り和ふる歌二首

我妹子が形見の合歡木は花のみに咲きてけだしく実にならじかも（八・一四六三、春相）

花を詠む

花咲きて実は成らねども長き日に思ほゆるかも山吹の花（十・一八六〇、春雑）

問答

狭野方は実にならずとも花のみに咲きて見えこそ恋のなぐさに（十・一九二八）

結婚しない

○枯れる

山部宿祢赤人の歌一首

我がやどに韓藍蒔き生ほし枯れぬれど懲りずてまたも蒔かむと思ふ（三・三八四、雑歌）

二三

次に、植物に対する人間の動作、作用が寓喩になっているものをみていく。これには、種を求める、蒔く、植える、下枝を取る、標縄をはる、手折る、頭挿にする、摘む、実を抜く、衣に摺る、刈る、衣にして着る、などがあげられるが、植物の一年のサイクルの生長過程に伴ったものであることは前と

同様である。ここでも、まず、特に寓喩であるとの指摘のないもの、寓喩の歌とすることについては問題のある歌についてみていきたい。

上野伊香保の沼に植ゑ小水葱かく恋ひむとや種求めけむ（十四・三四一五、相聞）

は、譬喩歌でないが「植ゑ小水葱」は女性を譬えたもので「種求めけむ」は恋を始める意ととってよいだろう。「種を蒔く」が寓意をもつ例としては、三・三八四、四〇四、四〇五、七・一〇九九、一三六二、十四・三三六四があり、これも恋を始めるというようなことを寓している。ただ、これらの「種蒔く」の表現が寓喩であるとの指摘は見当たらないので寓喩としてみた場合について簡単に述べたい。

山部宿祢赤人の歌一首

我がやどに韓藍蒔き生ほし枯れぬれど懲りずてまたも蒔かむと思ふ（三・三八四、雑歌）

については「枯れる」に寓意があるということとで前述したが、女性を譬えた「韓藍」によって歌われた「蒔き生ほし」「蒔かむ」も譬喩表現で、「種を蒔く」で、恋を始めることを譬え、一首は、あなたと恋を始め恋が終わったがまた始めたいという願望を歌った歌であろう。

娘子、佐伯宿祢赤麻呂の贈る歌に報ふる一首

ちはやぶる神の社しなかりせば春日の野辺に粟蒔かましを（三・四〇四、譬喩歌）

佐伯宿祢赤麻呂のさらに贈る歌一首

春日野に粟蒔かりせば鹿待ちに継ぎて行かましを社し恨めし（三・四〇五、譬喩歌）

四〇四の「神の社」が赤麻呂の妻を譬えた寓喩歌とされ、「粟蒔く」については「逢はまく」を懸けたものとされるのが一般である。「粟蒔く」の他の例、三・四〇五、十四・三三六四についても同様である。しかし、「粟（の種を）蒔く」は二人の仲が始まることを寓するのであって、一首の意はあなたに妻がいらっしゃらないならば、わたしはあなたと懇意になりましようの、となろう。四〇五の「鹿待つ」は、「あしひきの山椿咲く八つ峰越え鹿待つ君が蒔ひ妻かも」（七・一二六二、臨時）の「鹿待つ」が、「鹿の来るのを狙い待つ漁師の意で、浮気な男の漁色を譬えるか。」（全注）と考えられるところから、この譬喩歌の「鹿待つ」も単に鹿を捕らえるために待つ意だけでなく、獲物を捕る、おまえに逢いに行くの意を寓していると考えてよいだろう。一首は、おまえと恋仲になったならばおまえに毎日でも逢いにいこうものを、おまえには夫がいるので恨めしい、の意となる。

相聞

足柄の箱根の山に粟蒔きて実とはなれるをあわなくも怪し（十四・三三六四）

の「粟蒔く」も同様で、足柄の箱根の女と恋仲になり契りを結んだが、なかなか逢えないのが不思議なことよ、というのであろう。

丘を詠む

片岡のこの向つ峰に椎蒔かば今年の夏の陰にならむか（七・一〇九九、雑歌）

この歌も寓意をもつ歌であろうことは指摘されているが、椎は春に種を蒔いてその年の夏に日陰を作るほどになることはない、ので、実情に合わないところがあり、譬喩のあり方については明確でない。椎の種を蒔く、椎が繁り夏の日陰になるが寓意をもつのであろう。春、恋をはじめ、夏、恋の実ることを期待した歌であらうか。

## 花に寄する

秋さらば移しもせむと我が蒔きし韓藍の花を誰か摘みけむ（七・一三六二、譬喩歌）

「韓藍の花」が譬喩の媒体となつて、移す、蒔く、摘むが歌われ譬喩表現である。移すは移し染めのことで、植物の染料として染め（着）ることは、結婚する、自分のものとすることを譬え、摘むも同様である。窪田評釈に「婚期に達しない前から、わが妻と思つていた娘の譬喩」とあるように、一首の意は、秋になったならば結婚しようとした娘が恋仲になった娘をいったい誰が自分のものにしてしまったのだろうか、となるだろう。

植えるは、娘を育てる、手元において育てるの意を寓する。「譬喩歌」部に収められていないものも多い。

## 木に寄する

向つ峰の若楓の木下枝取り花待つ間に嘆きつるかも（七・一三五九、譬喩歌）

## 物に寄せて思ひを陳ぶる

橘の本に我が立ち下枝取り成らむや君と問ひし児らはも（十一・二四八九、譬喩歌）

の、「下枝取り」は求婚する、将来を約束する意を寓すると考えてよいと思うが、下枝を取る、とは具体的にはどのような目的があつてなされる動作なのだろうか。これについては「枝を取り持てば木精が感染し、よい事があるとされた。」（十一・二四八九、集成）、「歌垣に参加して『成らむや』と相手を誘う時の動作である。」（七・一三五九、全注）という発言がある。いずれがよいのか、あるいは別の解が良いのかわからないが、寓喩に用いられる植物への人の動作、作用は殆どが春から秋にかけての労働による動作、作用であることを考え合わせると、ここもそうした生産に伴う労働の作業といえないだろうか。「下枝取り花待つ」、「下枝取り成らむや」と、下枝を取る作業が花を待つとか実になるということを呼び起こすものであるらしいところから考えると、よりよく花や実をつけさせるために木の下枝を取り除く作業をいうのではないだろうか。

標縄を張る、は結婚相手として将来を約束するの意を寓し、根や浅茅を引く、手折る、摘む、刈る、木を伐る、頭挿にする、橘の実を貫く、衣に摺り付け（着る）、衣に織つて着る、弓末巻くは自分のものとすることを寓する。

## 春相聞

冬ごもり春咲く花を手折り持ち千度の限り恋ひ渡るかも（十・一八九一、人麻呂歌集）

の「花を手折り持ち」は、「千度の限り恋ひ渡るかも」とあるところから、思うようにならない恋に対する表現であるようにとれるが、代匠記の「手折以ハ、ソレヲ云ヒ靡ケテ我手ニ入ル、ニ喩フ」によつて、自分のものとすることを譬えたとし、自分のものとしながら激しく恋うる心を歌つたと解する。

## 相聞

うちはへて 思ひし小野は 遠からぬ その里人の 標結ふと 聞きてし日より……（十三・三二七二）

は小野を標結うで、具体的に植物名は歌っていないが、小野は植物によつて占められているということから、この中に入れた。

## 大伴宿祢駿河麻呂の歌一首

霞立つ春日の里の梅の花に問はむと我が思はなくに（八・一四三八、春雑）

の「梅の花に問はむ」は、花に実のなり具合を問うというようなことで喩と取れなくもないが、「梅の花」は坂上二嬢を譬えるのだろうか、「花に」は副詞と考え「花に問ふ」は喩とはとらないことにした。

奈良の京の荒墟を傷み惜しみて作る歌三首 作者審らかならず

紅に深く染みにし心かも奈良の都に年の経ぬべき（六・一〇四四、雑歌）

の「紅に深く染みにし」は「奈良の都への愛着の深さを譬喩的に述べたもの」（集成）で、これは今まで述べてきたのとは異質なもので、これについては先の場合と同様に扱う。また、花を待つ、根を見るは厳密に言えば人間が労力をもって行っていることではないが、広く人間の植物への動作としてこの中に入れて考えた。

以上の考察をもとにこれらを一覧すると次の項のようになる。

#### 四

恋を始める

○種を求める

相聞

上野伊香保の沼に植ゑ小水葱かく恋ひむとや種求めけむ（十四・三四一五）

○種を蒔く

山部宿祢赤人の歌一首

我がやどに韓藍蒔き生ほし枯れぬれど懲りずてまたも蒔かむと思ふ（三・三八四、雑歌）

娘子、佐伯宿祢赤麻呂の贈る歌に報ふる一首

ちはやぶる神の杜しなかりせば春日の野辺に粟蒔かましを（三・四〇四、譬喩歌）

佐伯宿祢赤麻呂のさらに贈る歌一首

春日野に粟蒔かりせば鹿待ちに継ぎて行かましを杜し恨めし（三・四〇五、譬喩歌）

丘を読む

片岡のこの向つ峰に椎蒔かば今年の夏の陰にならむか（七・一〇九九、雑歌）

花に寄する

秋さらば移しもせむと我が蒔きし韓藍の花を誰か摘みけむ（七・一三六二、譬喩歌）

相聞

足柄の箱根の山に粟蒔きて実とはなれるをあわなくも怪し（十四・三三六四）

娘を育てる、手元において育てる

○植える

大伴坂上郎女の橘の歌一首

橘をやどに植ゑ生ほし立ちて居て後に悔ゆとも験あらめやも（三・四一〇、譬喩歌）

和ふる歌一首

我妹子がやどの橘いと近く植ゑてしゆゑに成らずは止まじ（三・四一一、譬喩歌）

大伴宿祢家持、藤原朝臣久麻呂に報へ贈る歌三首

うら若み花咲きかたき梅を植ゑて人の言しみ思ひそ我がする（四・七八八）

或者、尼に贈る歌二首

手もすまに植ゑし萩にやかへりては見れども飽かず心尽くさむ（八・一六三三、秋相）

衣手に水渋付くまで植ゑし田を引板我が延へ守れる苦し（八・一六三四、秋相）

舍人皇子に献る歌二首

冬ごもり春へを恋ひて植ゑし木の実に成る時を片待つ我ぞ（九・一七〇五、人麻呂歌集、雑歌）

花を詠む

我がやどに植ゑ生ほしたる秋萩を誰か標刺す我に知らえず（十・二二一四、秋雑）

女が若く大人になっていない

○花を待つ

木に寄する

向つ峰の若楓の木下枝取り花待つい間に嘆きつるかも（七・一三五九、譬喩歌）

求婚する、将来を約束する

○下枝を取る

木に寄する

向つ峰の若楓の木下枝取り花待つい間に嘆きつるかも（七・一三五九、譬喩歌）

物に寄せて思ひを陳ぶる

橘の本に我が立ち下枝取り成らむや君と問ひし児らはも（十一・二四八九、人麻呂歌集）  
○標縄を張る

余明軍の歌一首

標結ひて我が定めてし住吉の浜の小松は後も我が松（三・三九四、譬喩歌）

大伴宿祢駿河麻呂の梅の歌一首

梅の花咲きて散りぬと人は言へど我が標結ひし枝ならめやも（三・四〇〇、譬喩歌）

大伴宿家祢持の歌一首

あしひきの岩根こごしみ菅の根を引かば難みと標のみそ結ふ（三・四一四、譬喩歌）

草に寄する

葛城の高間の草野はや知りて標刺さましを今そ悔しき（七・一三三七、譬喩歌）

山高み夕日隠りぬ浅茅原後見むために標結はましを（七・一三四二、譬喩歌）

君に似る草と見しより我が標めし野山の浅茅人な刈りそね（七・一三四七、譬喩歌）

三島江の玉江の菰を標めしより己がとそ思ふいまだ刈らねど（七・一三四八、譬喩歌）

稲に寄する

石上布留の早稲田を秀ですとも縄だに延へよ守りつつ居らむ（七・一三五三、譬喩歌）

大伴家持、紀郎女に贈る歌一首

なでしこは咲きて散りぬと人は言へど我が標めし野の花にあらめやも（八・一五一〇、秋雑）

花を詠む

我がやどに植ゑ生はしたる秋萩を誰か標刺す我に知らえず（十・二二一四、秋雑）

水田を詠む

あしひきの山田作る児秀ですとも縄だに延へよ守ると知るがね（十・二二一九、秋雑）

譬喩歌

祝部らが斎ふ社のもみち葉も標縄越えて散るといふものを（十・二三〇九）

物に寄せて思ひを陳ぶる

春日野に浅茅標結ひ絶えめやと思ふ人はいや遠長に（十二・三〇五〇）

相聞

うちはへて 思ひし小野は 遠からぬ その里人の 標結ふと 聞きてし日より……（十三・三二七二）

京人に贈る歌二首

妹に似る草と見しより我が標めし野辺の山吹誰か手折りし（十九・四一九七、家持）

結婚する、自分のものにする

○引く

大伴宿祢家持の歌一首

あしひきの岩根ごごしみ菅の根を引かば難みと標のみそ結ふ（三・四一四、譬喩歌）

譬喩

ま葛延ふ小野の浅茅を心ゆも人引かめやも我がなくなに（十一・二八三五）

右の四首、草に寄せて思ひを喩へたるなり。

○手折る

大宰大監大伴宿祢百代の梅の歌一首

ぬばたまのその夜の梅をた忘れて折らず来にけり思ひしものを（三・三九二、譬喩歌）

旋頭歌

山背の久世の社の草な手折りそ我が時と立ち栄ゆとも草な手折りそ（七・一二八六、人麻呂歌集）

春相聞

冬ごもり春咲く花を手折り持ち千度の限り恋ひ渡るかも（十・一八九一、人麻呂歌集）

譬喩歌

小里なる花橘を引き攀ちて折らむとすれどうら若みこそ（十四・三五七四）

京人に贈る歌二首

妹に似る草と見しより我が標めし野辺の山吹誰か手折りし（十九・四一九七、家持）

○摘む

花に寄する

秋さらば移しもせむと我が蒔きし韓藍の花を誰か摘みけむ（七・一三六二、譬喩歌）

○刈る

あられ降り遠江の吾跡川楊刈れどもまたも生ふといふ吾跡川楊（七・一二九三、人麻呂歌集）



草に寄する

ま玉つく越の菅原我刈らず人の刈らまく惜しき菅原（七・一三四一、譬喩歌）

君に似る草と見しより我が標めし野山の浅茅人な刈りそね（七・一三四七、譬喩歌）

三島江の玉江の菰を標めしより己がと思ふいまだ刈らねど（七・一三四八、譬喩歌）

物に寄せて思ひを陳ぶる

三島江の入江の菰をかりにこそ我をば君は思ひたりけれ（十一・二七六六）

天平勝宝八歳丙申の二月、朔乙酉の二十四日戊申に 太上天皇・太后、河内離宮に幸行して、信を経て壬子を以て難波宮に伝幸したまふ。三月七日、河内国伎人郷の馬国人の家にして宴したまふ歌三首

住吉の浜松が根の下延へて我が見る小野の草な刈りそね（二十・四四五七、家持）

○木を伐る

造筑紫観世音寺別当沙弥満誓の歌一首

とぶさ立て足柄山に舟木伐り木に伐り行きつあたらず舟木を（三・三九一）

旋頭歌

み幣取り三輪の祝が斉ふ杉薪伐りほととしくに手斧取らえぬ（七・一四〇三）

○頭挿にする

丹生女王、大宰帥大伴卿に贈る歌一首

高田の秋野の上のなでしこが花うら若み人のかざしなでしこの花（八・一六一〇、秋相）

昔、娘子あり、字を桜児といふ。ここに二人の壮士あり、……

春さらばかざしにせむと我が思ひし桜の花は散り行けるかも その一（十六、三七八六）

○染まりに行く

七夕

我が七夕待ちし秋萩咲きぬ今だにもにほひに行かな彼方人に（十・二〇一四、人麻呂歌集）

○実を貫く

草に寄する

紫の糸を我が搓るあしひきの山橋を貫かむと思ひて（七・一三四〇、譬喩歌）

花に寄する

片搓りに糸をそ我が搓る我が背子が花橋を貫かむと思ひて（十・一九八七、夏相）

## 石川朝臣水通の橘の歌一首

我がやどの花橘を花ごめに玉にそ我が貫く待たば苦しみ（十七、三九九八）

右の一首、伝誦するは主人大伴家持宿祢池主なりと尔云ふ。

## ○衣に摺りつけ（着）る

笠女郎、大伴宿祢家持に贈る歌三首

託馬野に生ふる紫草衣に染めいまだ着ずして色に出にけり（三・三九五、譬喩歌）

衣に寄する

今作る斑の衣面影に我に思はゆいまだ着ねども（七・一二九六、人麻呂歌集、譬喩歌）

紅に衣染めまく欲しけども着てにははばか人の知るべき（七・一二九七、人麻呂歌集、譬喩歌）

椽の衣は人皆事なしと言ひし時より着欲しく思はゆ（七・一三二一、譬喩歌）

紅の深染めの衣下に着て上に取り着ば言なさむかも（七・一三二三、譬喩歌）

椽の解き洗ひ衣の怪しくもことに着欲しきこの夕かも（七・一三一四、譬喩歌）

草に寄する

我がやどに生ふる土針心ゆも思はぬ人の衣に摺らゆな（七・一三三八、譬喩歌）

月草に衣色どり摺らめどもうつろふ色と言ふが苦しき（七・一三三九、譬喩歌）

真鳥住む雲梯の社の菅の根を衣にかき付け着せむ児もかも（七・一三四四、譬喩歌）

月草に衣は摺らむ朝露に濡れての後はうつろひぬとも（七・一三五五、譬喩歌）

木に寄する

白菅の真野の棒原心ゆも思はぬ我し衣に摺りつ（七・一三五五、譬喩歌）

花に寄する

住吉の浅沢小野のかきつはた衣に摺り付け着む日知らずも（七・一三六一、譬喩歌）

秋さらば移しもせむと我が蒔きし韓藍の花を誰か摘みけむ（七・一三六二、譬喩歌）

譬喩

紅の深染めの衣を下に着ば人の見らくにはひ出でむかも（十一・二八二八）

譬喩歌

伊香保ろの沿ひの榛原我が衣に着き宜しもよひたへと思幅（十四・三四三三）

苗代の小水葱が花を衣に摺りなるるまにまにあぜかなしけ（十四・三五七六）

○笠に縫う、縫って着る

物に寄せて思ひを陳ぶる

間野の池の小菅を笠に縫はずして人の遠名を立つべきものか（十一・二七七二）

問答

かきつはた佐紀沼の菅を笠に縫い着む日を待つに年そ経にける（十一・二八一八）  
おして難波菅笠置き古し後は誰が着む笠ならなくに（十一・二八一九）

右の二首

譬喩

三島菅いまだ苗なり時待たば着ずやなりなむ三島菅笠（十一・二八三六）

○衣に織って着る

大網公人主の宴吟の歌一首

須磨の海人の塩焼き衣の藤衣間遠にしあればいまだ着なれず（三・四一三、譬喩歌）

草に寄する

をみなへし佐紀沢の辺のま葛原いつかも繰りて我が衣に着む（七・一三四六、譬喩歌）

木に寄する

たらちねの母がそのなる桑すらに願えば衣に着るといふものを（七・一三五七、譬喩歌）

○弓末まく

弓に寄する

南淵の細川山に立つ壇弓束巻くまで人に知らえじ（七・一三三〇、譬喩歌）

○矢に作る

草に寄する

近江のや八橋の篠を矢はがずてまことあり得むや恋しきものを（七・一三五〇、譬喩歌）

○根をみる

月に寄する

春日山山高からし石の上の菅の根見むに月待ち難し（七・一三七三、譬喩歌）

一時的に慰みにする

## ○散らす

大伴坂上郎女の歌一首

風交じり雪は降るとも実にならぬ我家の梅を花に散らすな（八・一四四五、春雑）

関係をもっただけで結婚しない

## ○刈り取っただけで編まない（敷かない）

施頭歌

梯立の倉椅川の川のしづ菅我が刈りて笠にも編まぬ川のしづ菅（七・一二八四、人麻呂歌集）

譬喩

み吉野の水隈が菅を編まなくに刈りのみ刈りて乱りてむとや（十一・二八三七）

譬喩歌

しなたつ 筑摩狭野方 息長の 越智の小菅 編まなくに い刈り持ち来 敷かなくに い刈り持ち来て 置きて 我を偲はす 息長の 越智の小菅（十三・三三三三）

結婚しない

## ○枯らす

譬喩歌

あしひきの山かづらかげましばにも得難きかけを置きや枯らさむ（十四・三五七三）

## おわりに

以上で植物が寓喩になっている例をほぼ尽くしたが、

譬喩歌

我がやどの毛桃の下に月夜さし下心良しうたてこのころ（十・一八八九）  
 の「毛桃の下に月夜さし」がどういうことを譬えているかについては諸説あるが、「月夜さし」が「毛桃（の下）」の類縁関係にある表現なのかということも含めて、どういうことを譬えているのか定かでないので除外してある。

上に見て来た植物に関わる寓喩はいつたどのような発想によってのものであろうか。すでに見てきたように、これら植物に関わる寓喩表現のほとん

どは、植物の一年間を単位とする成長過程とその成長過程における人の作用、動作であった。ということからいえば、こうした喩喩は植物の成長を目の当たりにする、生活の糧や用具としての植物の生産に関わる人々がその発想を担ったのではないか、という推測が可能である。具体的には作業の場や歌垣ということが出来るだろう。「譬喩歌」には巻七のものを中心に作者未詳のものが多いこともあつて、謡い物という性格づけをされることが多かった。近時のものとしては巻七のいくつかに対し歌垣の場の表現と指摘する全注がある。一年間にわたる植物の生長過程、植物を生活の具として活用する作業、生活の習俗の殆どが喩喩表現になっていることを考えると、こうした指摘は無視できない。しかし、ひとつ欠落していることがある。人々の生活の中で植物がもつとも重要なのは、食料としてのもの、ということであるはずである。しかし、葉を食べる、葉柄を食べる、花（茅花）を食べる、実を食べる、といった表現は喩喩表現としては見当たらないのである。さしづめこういう表現は女性を自分のものとする、といった譬喩に用いられるのだろうが、それが労働や歌垣の場での歌にならばあつておかしくない歌い方だろう。が、この喩喩はあまりにも直截にすぎる。そういった表現上での美意識とでもいう意識が働いて避けられたのであろう。こういう表現がさけられたところに、万葉集の喩喩歌のあり方を暗示してはいないだろうか。そういうことも含めて万葉集の喩喩歌について改めて別稿で考えてみたい。

## 注

- (1) 「譬喩歌と縁語」『万葉集研究』第三集 昭和四九年六月
- (2) 「万葉集の『喩喩歌』」『語文』四二 昭和五八年十一月
- (3) 注(1)に同じ。
- (4) 攷証
- (5) 代匠記
- (6) 注(2)に同じ。
- (7) 集成。全注にも同様な指摘がある。